



## 教育への提言

### 人権教育について

人権教育の基本はそれぞれの人の存在が平等であることを認めることです。国連ユネスコは「すべての人が排除されない学校社会づくり」を目標としています。インクルージョンの教育と呼ばれています。

なぜ、すべての人間は平等な存在として認める教育にこだわるのでしょうか。すべての人間の存在を平等に認めていく教育の背景には、障がい、人種、病気、貧困などによる排除の現実があります。人間はいかなる理由があろうとも、無視されたり、排除されると辛くなります。「誰でも人とつながりたい、のけものにされたくない」と思っています。「あなたは皆と一緒に学ぶより、特別な場所で学んだ方がよい」と教育の「配慮」が続いています。しかし、それは本人には自分の能力の否定ととらえられます。さらに「私は人よりも劣る人間」と劣等感につながることもあります。

自分を否定的にとらえることは生きていく力、その人の発達、人との関係までも阻害します。しかしながら、人を障がいにより、教育の場を分けている現実があります。

### すべての子どもは平等にスペシャルな存在

国連ユネスコでアドバイザーをしたトレイ・ジョンソンは「すべての子どもは多かれ、少なかれ多様なニーズがあり、スペシャルな存在である」との子ども観を提起しました。

この考えの基本は「すべての子どもは平等に認められる」スペシャルな存在としたことです。そして、特別なニーズがある子どもをみんなのこととして普遍化しました。その理由には障がいのある子どもだけではなく、本人の意志にかかわらず教育の場を分けられる子どもたちの現実があります。

「能力に適した教育ができる場」を配慮するとの理由で、子どもたちの生活、人間関係に影響する教育の場の分離は正当化されています。たとえば、学力の習熟度を基に評価されている現実があります。そのクラス分けにより、学力の格差により、自分を否定してとらえている子どもたちもいます。「ありのままの自分」が認められるのではなく、「がんばらなければ。そしてよい結果を勝ち取らないと良い子どもとみなされない」現実も生まれています。

「時には誇りに思う自分とは違うものが、学校で一方的に創り出され、そこに自己崩壊、自己分裂の現実がある」と横塚晃一は述べています。「能力により、子どもを分ける」現在の教育は、「人間が平等に生きる」との人権教育の基本を侵害していることが見えてきます。

人権について学ぶことは日常生活と隣り合わせにある人権の抑圧、差別の現実について、知ることでもあります。そして誰もが人権を侵害されることだけではなく、侵害する立場になることも気づかなければなりません。

私は日本人であり、男性であり、職業人としては教員であり、家庭では、親であり、夫であるとの多様な立場をもちます。複数性を持ち、人権侵害を（する一される）立場との二重性に生き

ています。自分は人権侵害と無関係とは言えません。なぜならば自分の立場は相手との間で常に相対化されるからです。教育の場で働き、建て前は「教育の平等性」を説きながらも効率を重んじて、人権思想と矛盾する現実もつくっています。人権の課題に向き合い、自らの差別性に向き合う、そして自分の内面の価値観を変えていける人間になれるのかが大きな課題と考えています。すべての人と共に本音で学び合える人権教育のスタートをしたいと考えています。

## 「一緒がいいならなぜ分けた」分離教育の課題

我が国での分離教育を考えます。北村小夜さんの著書「一緒がいいならなぜ分けた」のなかの「五くみ、くせえの」の話から引用します。特殊学級で学ぶくんが、全校集会での「普通学級」の子どもたちのまなざしに怒り、けんかをします。けんかの後で、校舎の片隅に暗く陰気に隔離・分断されている特殊学級と、そこへ今帰っていく自分自身の存在のありさまを糾弾して「五くみ、くせえの」と叫ぶ姿が描かれています。障がいを理由に分けられ、自分の存在を蔑む姿があります。社会の否定的な障がいへの意識により、まわりの子どもたちから次第に離され、「障がい者」として孤立しているくん。「まわりの子どもたちと友だちになりたい、そして一緒に遊びたい、話もしたい」との思いが空回りしています。人との関係がつかれない孤立感、閉鎖感、自己の存在への不信感、否定感が<sup>ふくそう</sup>輻輳して、「ぼくは特殊の子どもだから」と、学ぶ意欲をおのずから削り落としていく様子がみえてきます。

## 「分離」教育がもたらすこと

分離教育がもたらしている問題として、次の点を指摘していきます。障がいのある人が「俺はどうせダメな人間なんや。特殊の子どもだから」と自分自身に対する価値づけをして、自分に期待しないことがみられます。つまり、「自信をなくしている」状況こそ、教育での大きな障がいであると考えます。自分自身の存在を認めて、自分を大切に生きていくとの基本がゆらいでいます。

学ぶ場が分けられる過程に「人の価値づけ」があり、それが大きな影響をもっています。また分けられた状況では、「自分自身の活性化のむずかしさ」があります。「ひとりぼっちでは元気になるのはむずかしい。元気になれるのは自分を認めてくれる友だちがいるから」と友だちを求めますが、本当に気持ちを受け止めてくれる友だちが限定されています。

このように、障がいのある人はいろいろな人間関係に出会う機会、特に利害関係でせめぎあう機会をうばわれていることがあります。

特別支援教育への歴史のなかでは、「一人ひとりの能力に応じる」との理由で人との関係を切られ、分けられる教育は、一人ひとりの子どもの権利を本当に大切にする教育なのだろうかとの疑問を問い続けてきました。自分が望まないのに「学力」で他人から評価され、友だちのいる学級から離され、別の学習の集団で「学力」の向上のために学習させられることは、「生きる力」を育てる教育になるのでしょうか。